

第 220 回研究報告会「天理教における歴史への視座」

遠藤正彦（天理教校）

標記報告会が10月1日（木）に開催された。遠藤氏は、問題の所在を次のように述べている。

「エリアードはその著『永遠回帰の神話 祖形と反復』の副題に「歴史哲学序説」を与えている。『永遠回帰の神話』では主に第3章「不幸と歴史」、第4章「歴史の恐怖」において宗教と歴史の関係が検討されている。そこでエリアードは近代人が取りつかれている歴史主義という恐怖からの回避を意図し、最終的に「キリスト教」にその可能性を見出している。ここでは、その是非を問うことを直接の問題にしない。しかし、エリアードが提起するように歴史をどのように理解するのかという歴史認識の問題はまだ検討されなければならないであろう。天理教において歴史はどのように理解されているのか。そのためにも、ここでは、先学の研究の中から主に深谷忠政『天理教教義学序説』における、歴史への接近方法を手がかりに天理教における歴史への視座の一つを検討していきたい。」

そして、「親神は、この世界の中に、まず空間時間となって人間世界を創造されるのである。そして展開される人間の成人の歴史というものは、親神と人間の協働になるものである。その歴史の中には親神の理があり、歴史によって親神の理を会得するのであるが、歴史が、すなわち親神の働きではない。歴史は合理と非合理の弁証法的産物であり、この世も歴史は常に神意より批判の対象となる応法の理のものである。」（深谷、同上、p.120）という叙述を以下の視点から検討している。すなわち、親神と歴史という視点から、創造の原点および歴史の展開を検討し、前者から「親神によって創造された『人間世界』の時間的過程を歴史と見なす」、後者から「啓示は非連続性を明らかにすると同時に人間からのよびかけを促進するという呼応関係に人間をおく」という経過的な結論を出している。また、歴史と理、歴史と弁証法という視点からの検討が行われた。

そして、その展望として、歴史と「ひながた」を考えると、現実的な歴史としての「ひながた」を認識する視座として、明治20年陰暦正月26日の「おさしづ」から、(教祖)「ひながた」それ自体が一つの歴史であると同時に、歴史全体を示しているのではないだろうかという提言が示された。

(文責：堀内)

台湾伝道史調査の一環として斗六教会訪問

深川治道

10月11日に、台湾中部の雲林県にある斗六教会を訪れた。斗六教会は昭和9年の設立で、昭和10年2月の『天理時報』に「本島人ばかりの教会」で「盛大な奉告祭」が行われたことが、また昭和14年11月の同紙に、当時の海外伝道部から優秀な海外教会として褒章を受けた三つの教会のうちの一つであることが報じられている。調査当日は教会の秋季大祭で、山田道興会長からご本人がまとめた手書きの「斗六教会史」をいただいた。祭典終了後、限られた時間ではあったが、昼食の時間を利用して、戦前の斗六教会を知る信者の方々からお話を伺い、その後、山田会長に戦前の斗六教会所在地に案内していただいた。

日本宗教学会第 69 回学術大会

標記大会が9月11日から13日の日程で、京都大学で開催された。12日と13日の研究発表では、パネル発表および個人発表に、本学関係では以下の参加があった。

澤井 義次：「オットー宗教史学の方法論再考」

松田健三郎：「転回と回心—バルトとアウグスティヌスの場合—」

山田 政信：「ブラジル産ネオペステコスリズムの日本における展開」

東馬場郁生：『武士道』にみる比較の言説（パネル「キリスト教と伝統思想—武士道をめぐって—」）

島田 勝巳：「クザーヌスにおける“神の名”の問題」

岡田 正彦：「演説・講演というメディアと近代仏教—啓蒙から修養へ—」（パネル「明治仏教史を上書きする」）

堀内みどり：「『みかぐらうた』のひのきしん」

澤井 一郎：「天理教原典Ⅲにおける『かしの・かりもの』の理」（天理教校研究所）

幡鎌 一弘：「稿本天理教教祖伝の成立」（パネル「教祖伝の脱構築」：このパネルは研究所の宗教研究会での共同研究をもとに幡鎌氏が代表となって組織された。堀内はこれにコメンテーターとして参加）

(報告：堀内)

「現代宗教と対話の精神」報告

標記シンポジウムが11月7日、大正大学を会場に開催された。主催は財団法人国際宗教研究所（理事長：星野英紀・大正大学教授）。このシンポジウムは、宗教団体や宗教伝統との間の、またこれらと現代社会や市民との間の対話の意義や課題を探ることを意図して企画された。そうした宗教をめぐるさまざまな対話の促進は、1994年から同研究所が脇本平也前理事長の下で新たに活発な活動を開始して以来、15年間にわたって取り組んできた活動の根幹をなすものでもあった。

発題者とそのテーマは次の通り（発表順）。

・金子昭（天理大学おやさと研究所教授）：「宗教対話は開かれた「他流試合」で—宗教学問学からの提言—」

・杉谷義純（大正大学理事長／前世界宗教者平和会議日本委員会事務総長）：「世界の諸宗教対話の潮流と日本宗教者」

・田中恆清（岩清水八幡宮宮司／神社本庁副総長）：「日本人の信仰の源流—神も仏も—」

・ムケンゲシャイ・マタタ（オリエンズ宗教研究所所長）：「出会いから始まる対話と諸宗教の神学」

・本山一博（玉光神社権宮司）：「宗教的探求としての宗教対話—新体験主義—」

コメンテータは近藤光博・日本女子大学准教授、司会は島菌進・東京大学教授／国際宗教研究所所長であった。

シンポジウム終了後に第4回国際宗教研究所賞の授賞式があり、またその後の懇親会は昨年10月に逝去された同研究所前理事長の脇本平也氏を偲ぶ会もかねて開催された。

(報告：金子昭)

平成 21 年度公開教学講座「みかぐらうた」の世界を味わう②
 第 7 講：「まだあるならバわしもゆこ」（十一下り目）
 （10 月 25 日） 堀内みどり

はじめに

永尾隆徳氏は『みかぐらうたの心』（天理教道友社、2008 年）で、「十一下り目は、陽気ぐらし世界の中心となるべきおやさとの建設に丹精する道の子の姿、またひのきしんについて、述べられています。陽気ぐらし世界…その理想の姿の一つとして、まず、おやさをつくりあげさせていただくのです。また、国々所々では陽気ぐらしのひながたとしての教会をつくりあげていく。これが陽気ぐらし世界への着実な道であるといえます。」と述べ、深谷忠政氏は、『みかぐらうた講義』（道友社、昭和 55 年改訂版）において、「陽気ぐらしの世界は世界中の人々が、世界だめの教であるお道の信仰にはいり、心を入れかえることによって到来するのでありまして、めいめいお互いの心の問題が信仰の中心課題（11：2、4<堀内>）であります。しかし、信仰を単に観念的なもののみ考えてはならん（3：8、11：5）のであります。…おやさとかたに於て、親神様のお鎮まり下さいますぢば・かんろだいを囲み、世界一列の人々が親子団欒の生活をするところこそ我々の理想であります。十一下りのお歌は、おやさとかた建設に喜び勇んで丹精する道の子の姿、即ちひのきしん（日の寄進）を中心に述べられてある。」と総括されるように、11 下り目は「ひのきしん」に励む意義が歌われる。

1. 原典の中の「ひのきしん」

「おさしづ」では、「たすけとても一日なりともひのきしん、一つの心を楽しみ。たすけふしぎふしん、真実の心を受け取るためのふしぎふしん。」（明治 23 年 6 月 15 日）と論されるくらいで、関連する用語として「土持（ち）」という言葉が、「疾うから説いてある。土持々々と言うたる。日々どんな中にも厭わず、国に一つの事情の中も厭わず、心楽しんで来る。一荷の土どういう事に成るとも、何ぼのこうのうに成るとも分らん。」（明治 40 年 3 月 13 日）というような形で説かれている。いずれも「たすけふしぎふしん」のために「土持」ひのきしんに励む信者の喜びと関連する。つまり、「ぢば」の建設＝たすけの象徴に關与する喜びの姿である。

幡鎌一弘氏が「はたらき ひのきしん」（『天理教のコスモロジーと現代』、伝道参考シリーズ XVII、天理大学出版部、2007 年）で、「『みかぐらうた』で『ひのきしん』がうたわれてきたのは何故か」という問題に関心を呈しているように、「ひのきしん」は「みかぐらうた」で集中的に説かれる。しかしながら「みかぐらうた」で教えられたからこそ、「ひのきしん」は天理教信仰者の行動原理となったともいえる。

「みかぐらうた」では以下で「ひのきしん」が歌われる。

- ①やむほどつらいことはない わしもこれからひのきしん
- ②ひとことはなしハひのきしん にほひばかりをかけておく
- ③ふうふそろうてひのきしん これがだいゝちものだねや
- ④みればせかいがだんへと もつこになうてひのきしん
- ⑤よくをわすれてひのきしん これがだいゝちこえとなる
- (⑥いつへまでもつちもちや まだあるならバわしもゆこ)

⑦なにかめづらしつちもちや これがきしんとなるならバ

①（3 下り目）と②（7 下り目）以外は 11 下り目で歌われ、夫婦のひのきしんの姿は（たすけの）「ものだね」であり、（我）欲のないひのきしんは（たすけの／自らの信仰の）「肥え」になることが教えられる。ひのきしんの態度／行動こそが信仰を養い、夫婦（人と人と）の対し方の基本であることがわかる。

2. ひのきしんについて

松村吉太郎氏が『ひのきしん精神』（天理教道友社、昭和 7 年）の中で「斯くひのきしんと言う言葉は今日信徒間にも広く用いられ、又世間にも普く知られてゐる言葉であります。此の言葉の意義は未だ十分に解釈されて居らないやうであります。」とすでに問題としたように、「ひのきしん」は、身近な教理であるがゆえに本来の教えを本当に実践しているかという反省がある。

諸井慶徳氏の「我々は実に『ひのきしん』なる概念の下に我々の行為の在り方を表現せずにはゐられない。」「手踊りを行はして頂く心は又ひのきしんをつとめる心に相通ふ。…特に両者はその際の信仰的気持に於て密接なつながりを持つてゐると思はずにはゐられない。」「『ひのきしん』と『てをどり』は、…『おたすけ』とともに、実に本教の動的体现の三綱領（『ひのきしん序説』道友社、昭和 28 年改訂版）という指摘は、これらが同じ行動原理に依っていることを示している。

天理大学おやさと研究所編『天理教概説』（第 5 編 信仰：I 生活と信仰「4 たんのうとひのきしん」、昭和 56 年）が述べるように、「ひのきしんはどこまでも親神への献身であるとはいえ、この世の生活の中で展開されるかぎり、それはこの世界との関係、他者との関係の中で行ぜられることになる。その上、陽気ぐらしを見てともに楽しみたいという親神の思召に応えることがいわゆる寄進の最たるものとするなら、たがいに扶け合う生活、つまり主体にとっては人をたすける行いがひのきしんの重要な要素となる。」そして、「ひのきしんとは人のために苦勞することです。そしてひのきしんは物種ですから、いつかは陽気ぐらしの芽が出てくる」（西山輝夫『みかぐらうたの世界』天理やまと文化会議、1989）ということになる。

3. 「みかぐらうた」とひのきしん

こうして、「みかぐらうた」では、ひのきしんが信仰の物種となり、肥となる、すなわちひのきしんによって自己の信仰が深化すること、かりものの理が治まり「たんのう」の心から流れ出る感謝の喜びとなって「まだ、まだ」「もう少し、もう少し」という勇んだ心が行為となっていること、金品ではなく行為を神に捧げること（利己心／欲がない行為となる）、陽気ぐらし世界建設とその象徴としてのつとめ場所<おたすけ>建設がひのきしんの対象であることが説かれる。

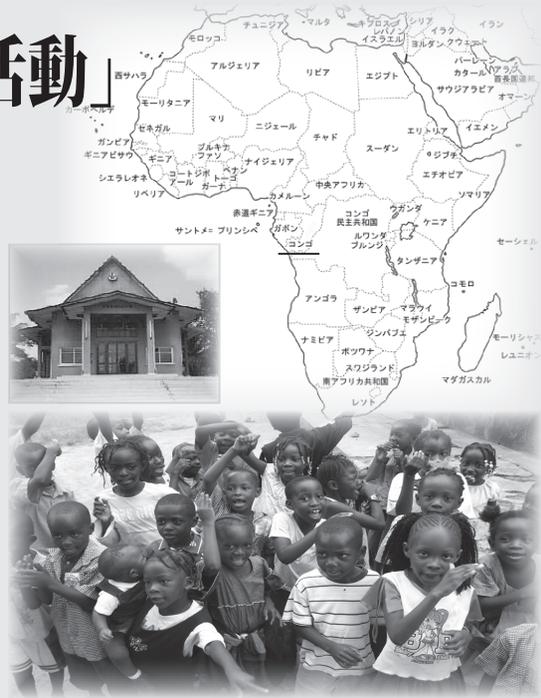
「ひのきしん」という働き方は、人は一瞬たりとも「行為」なしでは生きられない、どんな行為も「他」と関わっているとの自覚のもと、“互いに立て合い（尊敬）、助け合う”という協働の在り方を示していて、その有り様の基本は夫婦である。そして「夫婦揃って」「欲を忘れて」という信仰が教えられる。だからこそ、「いつへまでもつちもちや まだあるならバわしもゆこ」の境地で関わり合っていくことが望まれる。

第6回伝道フォーラム

「コンゴ伝道における諸活動」

コンゴ共和国では、1964年の教会設立と同時に開始された「憩の家」診療所の医療活動の他、柔道や日本語教室、また鼓笛隊といった活動が活発に行われてきた。現在では、それが教会が運営する託児所から幼稚園、小学校までの教育活動や読み書きができない人のための識字教室などに繋がっている。

そこで今回は、コンゴ伝道の上でこれまで展開されてきた医療や文化、スポーツ、教育などの諸活動に焦点を当て、海外伝道、とりわけ開発途上国と言われる地でのさまざまな布教伝道のあり方について考えていく。



開催日時：平成22年2月26日（金）午後1時から

開催場所：天理大学研究棟3階第1会議室

講演者

谷 徹也：奥地での布教活動を通じて（ルカク布教所の生活から）

柳瀬由利子：看護師の体験を通じて（「憩の家」診療所の活動から）

森 洋明：子どもの育成のための活動を通じて（鼓笛、コーラス、学校運営等の活動から）

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050 天理大学 おやさと研究所
FAX 0743-63-7255 E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

入場無料・来聴歓迎

『グローバル天理』年間購読のご案内

原則的に新年度は1月号からとなっております。購読料については、送料のみの実費負担です。申し込みは、封書、FAX、メールでお願い致します（お電話での申し込みはご遠慮下さい）。毎月の希望冊数と、氏名（フリガナも）、郵便番号、住所、電話、FAX、E-Mail、職業をお知らせ下さい。申し込み受付後に振込み用紙を送付致します。切手・現金でのお支払いはご遠慮下さいますようお願い致します。振込みを確認後、発送させていただきます。

送料（ヤマト運輸メール便）

全国一律、A4（角2）厚さ1cmまで（10冊まで）
80円でお届けします。

11冊以降は160円になります。

例 毎月1～10冊購読 80円×12ヶ月＝960円
毎月11冊～購読 160円×12ヶ月＝1,920円

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

天理大学 おやさと研究所 「グローバル天理」編集部

FAX 0743-63-7255 E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

グローバル天理

第10巻 第12号（通巻120号）

2009（平成21）年12月1日発行

発行者 井上昭夫

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

Printed in Japan